

身体障害者補助犬の専門職のかかわりに関する調査研究 調査概要

令和6年3月 社会システム株式会社

1. 本調査研究の目的

身体障害者補助犬（以下、補助犬という）については、訓練及び認定における専門職のかかわりが重要であり、令和3年度の「身体障害者補助犬の訓練及び認定のあり方検討会」においてもその重要性についての意見があったものの、専門職の補助犬に関して学ぶ機会は現状では少ない。そこで、言語聴覚士、理学療法士、作業療法士等の専門職の方々に対する調査により実態を把握し、かかわりのあり方について整理を行う。また、専門職に対する普及について検討するとともに、補助犬の普及につながるツール等を作成する。

2. 調査研究の結果概要

(1) 専門職の補助犬の認知度等に関する調査

障害者が社会参加を進めるために自立生活を考えるにあたって、「補助犬使用」がひとつの選択肢であることの情報を得るためには、そのタイミングにおいて関わりのある専門職がキーパーソンとなると考えられる。そこで、専門職における補助犬の認知度や、障害者との関わりの実態を把握するため、アンケート調査を実施した。対象の専門職は、社会福祉士・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・歩行訓練士とした。

○調査方法：各職域の協会を通じてアンケート調査についての案内をした上で、インターネットアンケートに回答をいただいた。

○回収：1,693サンプル（理学療法士100票、作業療法士931票、言語聴覚士515票、社会福祉士84票、歩行訓練士22票、その他41票）を回収した。

■補助犬への認識は薄い

盲導犬については、名前・役割ともに知っている人が9割を超えているものの、介助犬・聴導犬の割合は低く、また導入プロセス、補助犬法については9割以上が知らない状況にある。

■補助犬について学ぶ機会が少ない

社会福祉士・歩行訓練士については、「日々の業務」で補助犬について知る機会が比較的あるものの、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士は「業務外の自主的な学習」が知る機会となっている。また、自由記述を見ても、「教育課程や研修会などの学ぶ機会を作ってほしい」という意見が多数見られ、こうした「知る機会」が増えなければ知識を得られない現状にあると言える。

■補助犬を障害者にとっての選択肢として見ていない（こうした助言をしていない）

障害者の相談・助言をする上で、補助犬の使用については93.2%が「含んでいない」と回答しており、また、補助犬と暮らしたいという問い合わせも3.4%しか受けたことがない状況にある。また、自由記述では、「補助犬を選択肢に入れることを考えてもみなかった」という意見もあった。

■まずは、補助犬がどういう働きをしているのかを知ることから始めたい

自由記述を見ると、「まずは補助犬を知ることから始めなければならぬ」という記述が多数あり、補助犬が障害者に対してどんな支援をするのか、また導入プロセスや背景についても「知る」ことから始めなければならぬ現状にあると言える。

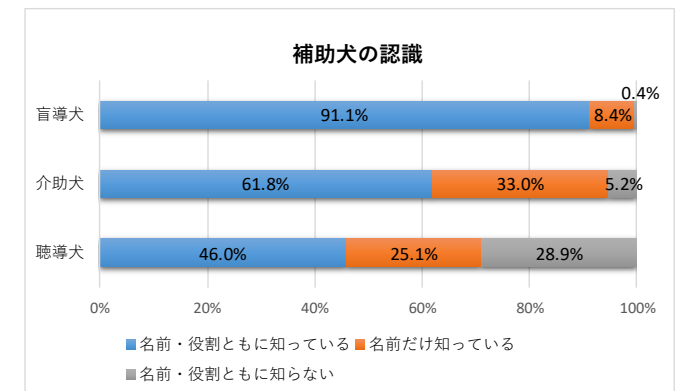
■補助犬を持つこと、誰に相談すべきかの情報提供が専門職の役割

専門職全体としては「補助犬を持つことへの情報提供」「補助犬について誰に相談すべきかの情報提供」を多くの方が挙げている。なお社会福祉士は「補助犬の貸与についての情報提供」も専門職の役割として多数挙げている。

■学ぶ方法としては、研修会、e-learning、簡潔なリーフレットが挙げられた

多く挙げられたのは「簡潔なリーフレット」「e-learning」であるが、職域ごとに見ると、相談に乗っている人は「リーフレット」を、治療・リハに当たっている人は「リーフレット」

「e-learning」を、教育・研究に当たっている人は「e-learning」を挙げている。



(2) 専門職の補助犬使用へのかかわりの実態調査

補助犬ユーザーの視点として、補助犬に関してどのような情報をどんなタイミングで提供されれば「補助犬を使用するという選択」に繋がると考えているかを把握するため、補助犬ユーザーへのヒアリング調査を実施した。

○調査方法：補助犬ユーザーに対するヒアリング調査

○対象：8名（盲導犬ユーザー2名、聴導犬ユーザー3名、介助犬ユーザー3名）

	障害、ユーザー歴について
盲導犬ユーザー	①ユーザーA 先天性。ユーザー歴は10年以上 ②ユーザーB 中途障害。ユーザー歴は10年以上
聴導犬ユーザー	③ユーザーC 先天性。ユーザー歴は10年以上 ④ユーザーD 先天性。ユーザー歴は10年以上 ⑤ユーザーF 中途障害。ユーザー歴は10年以上
介助犬ユーザー	⑥ユーザーC 交通事故。ユーザー歴は10年未満 ⑦ユーザーD 進行性。ユーザー歴は10年未満 ⑧ユーザーF 進行性。ユーザー歴は10年未満

■補助犬使用を選択したきっかけ

- ・補助犬の情報には、ほとんどが「自分で調べて」たどり着いている
- ・社会参加や生活のあり方のイメージをする中で、「補助犬の使用」を有効と感じた
- ・積極的な外出、自立した生活のために、「補助犬を使用すること」を選択している

○視覚障害者

- ・生活をどのようにしていこう？と考える中で、たくさんのユーザーの声や本を読んで「盲導犬と暮らすこと」がイメージできた
- ・体験歩行をしてみて、外出の機会が広がるのではないかと楽しかった

○聴覚障害者

- ・外で働くことへの不安を抱えていたが、新聞で聴導犬について知り、働くことに意欲がわいた
- ・子どもを育てていく中で、聴導犬のサポートが自分にとって必要なものと思った
- ・聴導犬への興味から、他のユーザーと繋がり、補助犬との暮らしを希望した

○肢体不自由者

- ・積雪時に溝にはまって動けなくなった時、調べて「介助犬」という存在を知り、一人での外出時に安心できるのではと思った
- ・リハビリテーションセンターで出会った人が介助犬ユーザーとなり、興味を持った
- ・手の力が弱くなっていく中で、介助犬の存在を知り、家族に迷惑をかけずに生活ができるのではないかと考えた

■自立した生活について考えたタイミング

リハビリや訓練等を行っていく中で、自立した生活のイメージを考えている

➡各障害の「生活をどうしていくか」のイメージを考える段階において、その人のイメージにあった補装具やサポートの情報を適切に提供し、それぞれの人があったより良い生活を立てていくことができることが重要。

○視覚障害者：

盲学校、歩行訓練、日常訓練をしていく中で、自分の生活のイメージができる

○聴覚障害者：

ろう学校等の機会はあるが、視覚障害者や肢体不自由者とは違って日常生活をしていけるために、考える機会はさまざま。

○肢体不自由者：

急性期では生活について考える余裕がないが、回復期に入って生活をどうするか考えられるようになる。リハビリを行う上で専門職に相談して補装具使用について考えるが、専門職は生活全般のイメージまでは相談できないこともある。

(3) 専門職の補助犬のかかわりのあり方に関する検討（アウトプットの方向性）

専門職の方々に補助犬のことを知っていただき、補助犬の普及につなげていくために、実態調査で得られた専門職が求めている情報内容、学びの機会の視点から、アウトプットの方向性を検討した。

実態調査から整理された、求められているアウトプット

■ 求められている「内容」

- 専門職自身が「補助犬」について知ること
- 障害者の相談・助言時に「情報提供」ができる程度の知識を持てること
 - … 補助犬はどんな人が持てるのか、誰に相談するとよいのか

■ 求められている「学びの機会」（どんなツールが必要か）

- 業務中などに活用できる「簡潔なリーフレット」
 - … 基本的な情報やポイントが示されている
- 研修や自分の知識を深めていくために活用できる「教材ツール」
 - … 教育課程や研修に使える教材
- E-learningに活用できる動画（情報センターの動画プログラム等既往素材の活用）



アウトプット作成の方針

1. 障害者の中には、「補助犬使用が選択肢の一つである人がいる」ことへの理解
 - すべての障害者にとって補助犬使用が必要ではないが、社会参加や生活の質の向上のために「補助犬使用が選択肢の一つである人がいる」ことを認識していただく必要がある。
2. 補助犬についての「情報提供」ができるよう、基本的な補助犬の機能を伝える
 - 盲導犬の認知度は高かったものの、介助犬・聴導犬は名前・役割ともに知らないという人もいた。また「まずは知ること」「知識を増やすこと」などのご意見もあり、基本的な情報、障害者にどんな支援ができるのかなど基本的な情報のインプットが必要。
3. 補助犬の使用による障害者にとっての効果を伝える
 - 専門職の方たちが補助犬の普及啓発を図っていくには、「障害者にもたらす補助犬使用の効果」などの情報も認識しておくことが必要である。
4. 障害者を補助犬使用につなげていくために必要な「誰に相談すべきか」の情報を提供する
 - ユーザー団体・支援団体・育成団体などの相談先の情報を提供することが必要である。
5. 学びやすい機会を生むためのツール展開
 - 専門職が学びやすい、使いやすいツールを展開していくことが必要である。

(4) 補助犬使用の普及につながるツール等の作成

専門職の方々に向けた補助犬使用の普及につながるツールとして、以下のリーフレットを作成した。リーフレットは、弊社ホームページにデータを公開し（転載可能として公表）、各専門職の協会等を通じたデータ案内、また専門職の養成機関（専門職の養成科のある大学、専門学校）へのダイレクトメールによる案内を行って周知を図った。

「身体障害者補助犬を使用する」という選択肢があることをご存じですか？

一補助犬は、障害者の補装具となり、社会参加を促し、精神面でのサポートも期待できます。



このリーフレットは、身体障害者の自立に関わる専門職（理学療法士、作業療法士、言語療法士、社会福祉士、心理士）の皆さまに、身体障害者補助犬の使用について知っていただくためのものです。補助犬の使用がQOLの向上につながる重要な要素です。多くの障害者が補助犬の活用により新たな生活の質を向上させています。

身体障害者補助犬を選択したユーザーの声とは？

自立生活と社会参加のために「身体障害者補助犬」を選択した身体障害者の方々が、（身体障害者補助犬）を如下より補助犬について

さまざまな補装具がある中、なぜ「補助犬を使用すること」を選択したのか、実際に補助犬ユーザーにインタビューを行いました。

どんなきっかけで「補助犬を使用すること」を選択しましたか？

- 補助犬を使用することで、精神的な外出に不安がなくなりやすくなった
- ユーザーがどんな生活にならざるを得ない、自分のこの生活に生活と向き合いたく、「補助犬の使用による変化は、他の補装具と同様の選択であること」に、さまざまな調べてきたこと

補助犬ユーザーである視覚障害者、聴覚障害者、肢体不自由の方

「外で働くことができないという不安がなくなり、自立生活が実現できるようになりました。また、社会参加の機会が増え、生活の質が向上しました。」

「以前は一人で生活していたのですが、補助犬の活用によって、外出が楽しくなりました。また、社会参加の機会が増え、生活の質が向上しました。」

「以前は一人で生活していたのですが、補助犬の活用によって、外出が楽しくなりました。また、社会参加の機会が増え、生活の質が向上しました。」

補助犬の使用によって、QOLを上げている人がいます

補助犬は、障害者の歩行、日常の生活動作などをサポートして、障害者の自立生活をしており、障害者のQOLの向上や安心感につながり、前向きになれるなどの心理的効果をもたらしています。

「障害者ユーザー」

- 外出が楽しくなりました。散歩や買い物など、自分のペースで外出できるようになりました。
- 一人で生活していたのですが、補助犬の活用によって、外出が楽しくなりました。また、社会参加の機会が増え、生活の質が向上しました。
- 以前は一人で生活していたのですが、補助犬の活用によって、外出が楽しくなりました。また、社会参加の機会が増え、生活の質が向上しました。

「介護ユーザー」

- 介護者が安心して介護が受けやすくなりました。歩行をサポートすることで、介護者の負担が軽減されました。
- 介護者が安心して介護が受けやすくなりました。歩行をサポートすることで、介護者の負担が軽減されました。

「介護ユーザー」

- 介護者が安心して介護が受けやすくなりました。歩行をサポートすることで、介護者の負担が軽減されました。
- 介護者が安心して介護が受けやすくなりました。歩行をサポートすることで、介護者の負担が軽減されました。

どの使用者からも聞かれたのは「社会とのつながりができる」ことでした。

「以前は一人で生活していたのですが、補助犬の活用によって、外出が楽しくなりました。また、社会参加の機会が増え、生活の質が向上しました。」

しかし、「補助犬の使用」に関する情報はうまく行き渡っていない状況にあります

補助犬に関する情報は、障害者が自分で探している実態にあります

補助犬に関する情報は、専門職の皆さんと障害者に関する情報提供が不足している実態があり、補助犬ユーザーは自分で探している状況です。

専門職の皆さんは補助犬について認知はまだまだ実態にありません

補助犬は、障害者のサポート補助犬として知られており、専門職の皆さんも認知は高まっていますが、補助犬に関する情報は、専門職の皆さんと障害者に関する情報提供が不足している実態があり、補助犬ユーザーは自分で探している状況です。

また、専門職が補助犬を希望する障害者に対して「果たすべき役割」や「補助犬の活用」に関する情報が不足している状況です。

専門職の皆さん！まずは、補助犬のことを知ってください

専門職の皆さんと関わっているタイミングが、補助犬の使用について考えるひとつのタイミングです

「補助犬を使用すること」は、自分の生活環境にあった補装具を選ぶのと同じように「選択」する必要があります。つまり、専門職の皆さんと関わるタイミングです。

QOLの向上も期待できる「補助犬の使用」という選択は、障害者だけでなく、介護者にも必要です

「補助犬を使用すること」は、自分の生活環境にあった補装具を選ぶのと同じように「選択」する必要があります。つまり、専門職の皆さんと関わるタイミングです。

また、専門職が補助犬を希望する障害者に対して「果たすべき役割」や「補助犬の活用」に関する情報が不足している状況です。

「補助犬の使用」について知っておいていただきたいこと

3種の補助犬が果たす役割を知ってください

身体障害者補助犬（補助犬）は、身体障害者補助犬法（以下、補助犬法という）の施行に当たり、新しく作られた言葉で、導盲犬・介助犬・聴覚補助犬を指します。補助犬法に基づいて、国家公安委員会（盲導犬）や厚生労働省が指定した指定人（介助犬、聴覚犬）が認定されています。

盲導犬 視覚障害者が安全に歩けるようにサポートします。障害物を避けたり、立ち止まったり曲がり角や段差を教えます。また、盲導犬は、盲導犬法に基づいて、国家公安委員会（盲導犬）や厚生労働省が指定した指定人（介助犬、聴覚犬）が認定されています。

介助犬 肢体不自由者の日常生活をサポートします。物を拾ったり置いたり、指示したものを渡ったり、服の着脱などをサポートします。

聴覚犬 聴覚障害者に必要な生活動作を知らせます。玄関チャイム、メールやFAX等の着信音、赤ちゃんの泣き声、車のクラクション等を聞き分け教えます。「聴覚犬」と表示をします。

補助犬の使用に係る法律

補助犬法は、自然な補助犬の育成と使用の促進などの目的の達成により、平成14年に施行された障害者の自立及び社会参加の促進を図るための法律です。補助犬使用者には、使用管理の責任が課せられています。また、補助犬使用者が国や地方自治体、公共交通事業者、不特定多数の方々を利用する施設を利用する場合、補助犬と同様に行うべきではないと規定されています。

〇注目の受け入れ施設

公共施設、公共交通機関、不特定多数の方々が入用する施設では、補助犬を同伴する身体障害者の入用を拒みず受け入れます。

障害者を「補助犬の使用に係る情報」につなげてください

一一般市民も、補助犬使用に対して、必要な協力をする形はなくてはなりません

〇補助犬使用者の役割の概要

- 補助犬使用者は、補助犬の育成管理、訓練管理、行動管理に努め、公衆衛生上の危害を生じさせてはなりません
- 身体障害者補助犬法や関連法令・通知等に基づいて、厚生労働省の補助犬に係るホームページに掲載されています。

〇身体障害者補助犬法や関連法令・通知等に基づいて、厚生労働省の補助犬に係るホームページに掲載されています。

補助犬を希望してから認定までのステップ

障害者が補助犬を希望してから認定までは、基本に以下のようになっています。

認定 認定申請書の提出、審査、認定

認定申請書の提出 審査 認定

認定申請書の提出 審査 認定

障害者を「補助犬の使用に係る情報」につなげてください

補助犬の育成管理や使用に関する情報は、補助犬に関する情報提供が不足している状況です。

補助犬の育成管理や使用に関する情報は、補助犬に関する情報提供が不足している状況です。

補助犬の育成管理や使用に関する情報は、補助犬に関する情報提供が不足している状況です。

補助犬を使用することについてもっと知識を深めたいときには

専門職の皆さんが、もっと補助犬について知識を深めたい場合には、厚生労働省をはじめ、支援団体、学会等が提供している情報があります。ぜひ、適切な知識を得るために活用してください。

厚生労働省 身体障害者補助犬に関するページ

特定非営利活動法人 日本補助犬情報センター ホームページ

〇一般社団法人 日本身体障害者補助犬協会 ホームページ

補助犬を使用することについてもっと知識を深めたいときには

専門職の皆さんが、もっと補助犬について知識を深めたい場合には、厚生労働省をはじめ、支援団体、学会等が提供している情報があります。ぜひ、適切な知識を得るために活用してください。

厚生労働省 身体障害者補助犬に関するページ

特定非営利活動法人 日本補助犬情報センター ホームページ

〇一般社団法人 日本身体障害者補助犬協会 ホームページ

専門職の皆さまへのメッセージ

このリーフレットは、令和5年度厚生労働省障害者総合政策推進事業「身体障害者補助犬の育成管理のあり方に関する調査研究」で設計した身体障害者補助犬の育成管理のあり方に関する調査研究の結果として作成されたものです。補助犬ユーザーの皆さんに知っていただきたいこと、この調査から、専門職の皆さまへのメッセージをお届けします。

障害者の皆さんが障害犬と補助犬を使用することに関する情報は、専門職の皆さんと障害者に関する情報提供が不足している状況です。

また、専門職が補助犬を希望する障害者に対して「果たすべき役割」や「補助犬の活用」に関する情報が不足している状況です。

専門職の皆さまへのメッセージ

このリーフレットは、令和5年度厚生労働省障害者総合政策推進事業「身体障害者補助犬の育成管理のあり方に関する調査研究」で設計した身体障害者補助犬の育成管理のあり方に関する調査研究の結果として作成されたものです。補助犬ユーザーの皆さんに知っていただきたいこと、この調査から、専門職の皆さまへのメッセージをお届けします。

障害者の皆さんが障害犬と補助犬を使用することに関する情報は、専門職の皆さんと障害者に関する情報提供が不足している状況です。

また、専門職が補助犬を希望する障害者に対して「果たすべき役割」や「補助犬の活用」に関する情報が不足している状況です。